

私の研究活動

大塚啓二郎

私の研究の特徴は、独自の現地調査を実施し、丹念な実証分析を行い、その成果を実際の開発政策に生かそうとするところにあります。またこれまで必死に論文を書き、査読付きの英文学術雑誌に投稿してきました。その成果が実って、128本の論文（主に共著）が雑誌に掲載または採択されています。さらに、8冊の英文共著書と15冊の英文編書を出版し、和文で10本の学術雑誌論文、2冊の単著書と2冊の共著書、4冊の編書を出版しました。以下では、私の研究の特質と研究業績について説明します。

I. 研究の特質について

私は、多様な分野で研究をしてきました。それは、（1）農業の技術進歩、特にコメの生産性の飛躍的な向上をもたらした「緑の革命」に関する研究、（2）土地制度、特に地主・小作契約や農地の所有権に関する研究、（3）貧困削減、特に教育と非農業部門の発展の役割に関する研究、（4）工業化、特に産業集積の発展に関する研究、に大別されます。こうした研究を常にアジアとアフリカの比較を念頭に置きながら展開してきました。なおこれ以外にも、経済史や政治学と開発経済学との融合を目指した「産業集積の歴史と開発途上国」や「国家建設と経済発展」についての研究、「戦後日本の経済発展」に関する研究があります。

私は、数多くの研究プロジェクトを様々な開発途上国で組織してきました。そして、現地の共同研究者とともに関連性の深い論文を国際的な学術雑誌に発表し、それを共著書または編書としてまとめて出版するという研究スタイルを

書いてきました。個々の雑誌論文に学術的価値があることは言うまでもありませんが、共同研究の成果としての論文が補完的な場合（例えばアジアとアフリカの産業集積の事例研究）、それを書物として出版することには大きな意義があると思っています。英文、和文ともに多くの編著書や共著書があるのは、私が多くの共同研究を行ったことの成果です。こうした共同研究の中から、巣立っていった若い研究者が沢山います。特に私が苦労した共同研究は、リーダーの一人として実施したアジア 7カ国の「緑の革命」に関する比較事例研究、土地制度と自然資源の管理に関するアジアとアフリカの 7カ国の比較事例研究です。事例研究をベースにした一つの研究プロジェクトで、7カ国もの事例を比較するというのはおそらく前例がないかもしれません。最大限のエネルギーを使って各国を飛び回り、奔走しました。さらに、政策研究大学院大学のグローバル COE「アジアの国家建設と経済発展の他地域への適用可能性」（2008年—2012年度）の拠点リーダーとして研究の先頭に立つとともに、国際農業経済学会では会長に選出され（2009年—2012年）、国際的な場でも私なりに活躍しました。

私は、研究と実践を結合させようと努力してきました。2004年1月から2007年12月までの4年間、アジアの「緑の革命」を主導した国際稲研究所（IRRI）の理事長に就任し、自らの研究上の信念に基づいて、それまでアジアを中心に研究をしていた IRRI の活動範囲をアフリカに広げることに尽力しました。その後は、国際開発機構（JICA）やゲイツ財団が支援する「アフリカの緑の革命のための共同体」（AGRA）に働きかけ、アフリカでのコメ生産を2008年から2018年までの10年間で倍増することを目指す「アフリカの稲作支援のための共同体」（CARD）の設立を主導しました。さらに、CARD を支援するためにアフリカの稲作に関する現地調査を6か国で実施し、その成果

をベースにして編書を出版するとともに、CARD へのアドバイスを行ってま
す。農業のみならず製造業についても、研究してきました。アフリカでは、製
造業に従事する零細・中小企業の経営が非効率であることに着目し、日本式の
KAIZEN マネージメントの普及をエチオピアの故メレス首相に進言しました。
それによってエチオピア政府が、「Ethiopian KAIZEN Institute」を設立する
こととなりました。エチオピアでは、KAIZEN ブームと呼べるような状況が生ま
れています。KAIZEN マネージメント研修の成果は、企業調査の実施によって
学術研究としてまとめられ、それをベースとして KAIZEN マネージメントの研
修プロジェクトへの支援が行われています。また私は、世界銀行のフラッグシ
ップ的出版物である『世界開発報告』の編集委員 (Core Member) に選ばれ、
2011 年から 2012 年にかけてワシントン DC に滞在して、その執筆活動を通
じて、世界銀行の開発に関する議論に一石を投じるように努力しました。

最後に、私が貧困を削減する効果的な開発戦略の構築を目指して、様々な研
究プロジェクトを実施してきたことを指摘しておきたいと思います。貧困削減
を実現するための手段としての農業の技術進歩、農村の所得分配を規定する土
地制度、貧困からの脱出の決め手となる人的資本、貧困者に雇用を提供する製
造業の発展について研究し、実践的な知識を踏まえながら、それらを総合化
(Synthesis) することに不断の努力をしてきました。その一つの成果は、日
本学術会議・国際地域開発研究分科会の委員長としてまとめた『日本型の産業
化支援戦略』(2017年3月)と題する提言に表れています。また、著書『なぜ
貧しい国はなくならないか』(日本経済新聞社、2014年3月)においても、独
自の調査研究の蓄積にもとづいた開発戦略の議論を展開しています。

II. 研究業績について

私は、開発経済学、環境経済学、農業経済学の各分野における一流雑誌、ならびに Journal of Political Economy, Journal of Economic Literature, Economica, Journal of Comparative Economics, Journal of Economic Geography, Economic History Review など、多くの分野において評価の高い国際的学術雑誌に数多くの論文を掲載してきました。

また私は、開発経済学のトップジャーナルの一つである Economic Development and Cultural Change の編集委員 (Associate Editor)、途上国の農業問題のトップジャーナルである Agricultural Economics の編集委員 (Member of Advisory Board)、国際的な食糧問題を扱っている学際的学術雑誌 Global Food Security の編集者 (Editor) を務めています。また過去には、開発と環境と問題を扱う代表的なジャーナルである Environment and Development Economics の編集委員 (Member of Editorial Board) も務めました。

私は、多くの権威ある賞を受賞するという幸運に恵まれました。1993 年には Journal of Economic Literature に掲載された地主小作契約に関する論文、“Land and Labor Contracts in Agrarian Economies: Theories and Facts” が、アメリカ農業経済学会の Quality of Research Discovery 賞に選ばれました。この賞は、一年の間に発表された農業経済学関係の最高の研究論文あるいは研究書に与えられる賞です。国内では、大塚・劉・村上 (1995) の中国の経済改革に関する研究、ならびに園部・大塚 (2004) の日台中の産業集積に関する比較研究で、ともに日経・経済図書文化賞を受章しました。さらに、開発経済学での顕著な学問的業績に対して、2010 年に紫綬褒章が授与されました。

海外でも、名誉ある出来事がありました。2012年に国際農業経済学会 (International Association of Agricultural Economists) の名誉会員 (Honorary Life Member) に選ばれ、2013年には農業応用経済学会 (Agricultural and Applied Economics Association、旧アメリカ農業経済学会) の名誉会員 (Fellow) とアフリカ農業経済学会 (African Association of Agricultural Economists) の名誉会員 (Distinguished Fellow) に選ばれました。現在、私は編者として、農業発展の研究における国際的権威を結集して *Agricultural Development: New Perspectives in a Changing World* と題する研究書の出版を目指しています。